師との再会

杉谷　淨

今年八月上旬、広島県にある寺川俊昭先生の御自坊にお伺いする機会がありました。先生には大谷大学大学院のゼミでご指導いただきました。今年で九十一歳になられる先生とお会いするのは、ほぼ三十年ぶりでした。学長も務められていた先生ですが、七十九歳の時、医療ミスにより脊髄に傷がつき、思うように身体が動かせなくなってしまいました。さらに近年、耳も遠くなり、物忘れも激しくなってきたということで、かつて大学院のゼミで教えを受けた者たちが、先生にお礼を申し上げるために集まろうということになったのです。全国から、先生のお寺に二十五人もの元学生が集まりました。そのうち何人かとは時々顔を合わせてはいたものの、中には三十年ぶりの学友もおり、互いに爺になったことを驚き合いました。また、半数以上は今回初めてお会いする方々で、先輩や後輩たちとの新しいご縁もいただきました。

私が学生だった頃から、先生は誰に対しても非常に丁寧な言葉遣いをされる方でした。今回も、私たちに「皆様方」と呼び掛けて下さり「いい人とご縁を結ぶことができた」とおっしゃっていただきました。理科系大学卒で仏教に関しては素人であった私に、親鸞聖人をはじめとする諸先輩方の情熱を、分かりやすく丁寧に語って下さった先生とご縁をいただいたことを、私の方こそ感謝しなければならないのに、ただただ頭の下がる思いでした。

先生は、九十歳で亡くなられた親鸞聖人を、一つ越える歳となられたことを、感慨深くお話された後、思い通りにならない身体のことよりも、緑内障により大好な読書ができなくなったことをとてもつらく思っていること、そして「厳しい人生の最終段階に差し掛かり、どのような死に方をするのか」ということが不安であることを包み隠さずお話になられました。仏教を学んだからといって、死ぬことや老いることが怖くなくなるわけではありません。わかったようなことを言ってさとりを開いたふりをすることなく、今の自分を正直に受け止めることができるのが念仏であると、先生は身をもって私たちに伝えてくださいました。

お話の最後に、私たちに対して「与えられた業を存分にお果たし下さいますよう、あらためてお願い申し上げます」と先生はおっしゃられました。もちろん、私たちには自らの努力によって手に入れた能力や環境もあります。しかしその努力さえも、生まれ持った環境や能力に支えられているのです。また、どのような人と出会ったか、どのような出来事に会ったか、どのような病気をしたかなども、自分で選んだわけではありません。「与えられた業」とは、その様な自分に与えられた能力や環境であり、自分に与えられた可能性です。それを「存分にお果たし下さいますよう」にと、私は先生からお願いされたのです。あらためて、素晴らしい先生と出会えたこと、そしてこの縁を与えてくださった方々に感謝の念を抱くことができた旅となりました。

自己責任って言うけれど

杉谷　伊吹

色々な情報が飛び交う現代社会。SNS（インターネットを介して人間関係を構築できるWebサービスの総称。例えばツイッター等）を活用していると、様々な意見を目にする機会があります。さて、私は最近そこにはびこる「自己責任論」というものに関して、ひとつ思うところがあるのです。

「自己責任論」とは「自分が起こした行動の責任は自分で取る」という考え方で、それ自体は理解しやすいものです。しかし、この「自己責任論」という言葉の使われ方に、見過ごすことの出来ない悪意が感じられるのです。具体的には、筋違いの責任転嫁や、的外れな言い訳としてたびたび使われているように思えるのです。例えば、何らかの失敗や挫折をした人に対して、冷やかな上から目線で「他人のせいにするな、自己責任だろ」と切り捨てる姿。このようにして、心無い批判を弱者に対して投げ掛ける声が、インターネット上で目につきます。相手となる存在に対し、無関心の姿勢で心理的距離を置き、そこから独り言のような形で中身のない説教をかますのです。

そもそも「自己責任論」は、他者に対して押し付けるものでは無いはずです。そして、もし活用するならば、自己研鑽や自己哲学の為の手段として、自らに向けて課すべきものだと思います。それは「自己責任論」とは、あくまで自分もしくは世の中を改善するための手段の一つであるからです。これも、実際のところ「自己責任論」が改善に役立てられるのか私には疑問なのですが、そのように上手に活用される人も多分居ると仮定しての話です。ともかく「自己責任論」は他者に向けられると、その本質を見失うという事になるのです。

この間違った「自己責任論」ですが、何を隠そう私自身も身に覚えがある考え方なのです。特に他者との争いを意識していた青年時代の頃は、大勢をこの自己責任論で切り捨てていました。何か嫌な出来事が起きていたとしても、その問題に対して労力を割きたくない為、見て見ぬふりをして思考から追い出すのです。自分の事だけを考え、人を蹴落とし糧とする生き方において、実際非常に都合のいい考え方だと思います。何故なら、他者を容易に切り捨てられるこの考え方は、相手の責任という前提である為、自らの良心を痛めることなく批判を投げつけられるからです。そして、必然的に対象を見下す為、優越感のようなものを得られてストレス発散にもなります。さらには、直接相手を傷つけるような行為にも至れば、いよいよ悪質の極みと言えるでしょう。しかし残念ながら、私は誰にとってもこの心理は他人事ではないと思います。生きる上であまり精神的な余裕がない人は、このような状況にも陥りやすいのではないでしょうか。少なくとも、私はそうでした。

そう考えると、いま社会で間違った自己責任論が展開されているのは、余裕を失った人が大勢苦しんでいる事の表れかもしれません。人と人がお互いに助け合い、余裕をもって生きられる世の中にしていければ、きっと良くなっていく問題です。私も、人と人がお互い無関心でいる世の中にならないよう、意識して努めていかなければならないと思っています。

本の紹介

かぼちゃ人類学入門

川原田（かわはらだ） 徹（とおる） 福音館書店 １９９４年

十月なのでこの一冊を。絵本ですが、子供向けというよりも大人にこそ読んでほしいと思います。

海に浮かぶ大きなかぼちゃに生命が芽生え、やがて、かぼちゃ人が生まれます。かぼちゃ人はかぼちゃを食べて生き、かぼちゃ製品を世界じゅうに売って大もうけをします。しかし、かぼちゃはやせおとろえ、滅亡の危機に瀕するようになってしまいました。ここで、かぼちゃ人はたくさん売って、たくさんの物を買い、たくさんのものを使ってくらすことは無理なことだと気づきます。かぼちゃ人はかぼちゃの恵みを大切に、貧しく、楽しく暮らすように生き方を変えました。その結果、再びみずみずしいかぼちゃ島に戻ったのでした。

のろまで、とんまだと言われているかぼちゃ人の暮らしを紹介しますと、せまい路地と、ひなたぼっこにぴったりの中庭、市場では、物々交換もさかんに行われています。かぼちゃ汁が発酵してできた、誰もが入れる温泉があり、学校は町の中にとけこんでいて、八百屋のおじさんや大工さんなど町中の人が先生で、子供たちはさまざまなことを学びます。幸福相互銀行には、お金だけでなく、健康や心の幸せも預けることができますが、身福・心福・金福の交換レートは１：２：１０となります。この世の中でいちばん広いのは心の中なので、かぼちゃ人は絵やお話やお芝居が大好き。かぼちゃ座では、毎日お芝居がかかります。何かもめごとが起こっても、わいわいがやがやと話し合っているうちに解決します。

絵本の表紙は年に一度のかぼちゃ祭りのおみこし。戦前の昭和のようなレトロな風景と生命力に満ち溢れた人々と、犬、猫、鶏や豚などの動物達。ああ、こんな世界に行ってみたいなあ、と思ったら、最後のページは、かぼちゃ島への観光案内と中庭小学校への留学案内でした。

作者の川原田さんは１９４４年生まれ、建築を学ぶため東京大学に入学するものの、自分の生き方に迷い中退。引きこもり生活の中で「植物も自分もこの世界の大きな自然の中に存在する、同じ生命体なのだ」と感じ、母なる大地を象徴するかのような「カボチャ」を題材とした作品を独学で作り出していったのです。作品の魅力は、次の言葉からも感じとることができるのではないでしょうか。「この世界にはたくさんの人や生き物がいます。全てに命があり、全てが等価値なのです。だからこそ、それらを一つも欠かさず、省略なしに描くのが私の理想です。」

現在では、トーナス・カボチャラダムスと改名し、２００２年から、カボチャドキヤ国立美術館の館長に就任しています。美術館内ではおよそ１００点の作品を展示しています。代表作は制作期間三年を要した大作「かぼちゃのブリューゲル」です。（登紀子）

カボチャドキヤ国立美術館　施設案内

所　在　地：北九州市門司区谷町二-六-三十二
電　　話：０９３-３３１-５００３
開館時間：午前十一時より午後四時
開　館　日：土曜・祝日（日曜日は休館）
入　館　料：一般三〇〇円・中高生百円
　　小学生以下無料
交　　通：ＪＲ門司港駅から徒歩二十五分
　　車五分（美術館横に駐車場二台分あり）

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちょう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっています。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますのでお気軽にご参加ください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

一〇月　大乗仏教の思想的展開
十一月　インド仏教の消滅と再生
十二月から二月まで冬休み
三月　日本の神々

昨年から始めました仏教入門講座の第一章インド仏教史も残すところ二回となりました。三月からは仏教講座第二章として「日本仏教史」を始めます。インドで深化していった仏教が日本でさらに独自の発展を成し遂げてきます。また、各時代の政治的な影響も受けることになります。日本古来の宗教がどのように仏教と出会い変化していったのかを二年かけて尋ねていきます。参加費はお賽銭のみです。どなたでもご参加ください。

表題揮毫　中田　八千代

徳法寺　石川県金沢市野町二丁目三二番四号
TEL　〇七六―二四一―五二一九
ホームページ　http://tokuhou-ji.com

令和二年　年忌法要のご案内

一周忌法要	令和元年死去（平成三十一年死去）
三回忌法要	平成三十年死去
七回忌法要	平成二十六年死去
十三回忌法要	平成二十年死去
十七回忌法要	平成十六年死去
二十五回忌法要	平成八年死去
三十三回忌法要	昭和六十三年死去
五十回忌法要	昭和四十六年死去